



日本語「読書感想文」 コンクール

優秀作品集
2020

主催：広島大学モンゴル研究センター
ウランバートル国立大学

後援：在モンゴル日本大使館

広島大学モンゴル研究センター 編

最優秀賞

宝探し

ボヤンジャルガル ソヨルエルデネ

モンゴル国立大学法学部 名古屋大学日本法教育研究センター 4年生

指導教員：八尾 由希子

大阪の大学に交換留学をしていた時、万博記念公園を訪ねた。広い公園を歩くと、木が多いからか涼しくて心地良かった。歩けば歩くほど何か良いことがありそうな気がして、ワクワクさせられた。その日、お土産屋の店員さんから「1970年の日本万国博覧会のホステスを務めるために、全国各地から外国語を話せる若い女性が集まっていた。その話が出てくる小説があるよ」と紹介された。それが蓮見圭一の『水曜の朝、午前三時』という本だ。タイトルの午前3時に何が起きたのかと探しながら読むことは、何か良いことを探しながら万博公園を歩くのと一緒だった。

ストーリーを語る「僕」はクラスメイトの葉子のお母さんのことをいつも不思議に思っていた。彼女は人見知りでいつもタバコを吸っている直美さんだ。かつて直美さんにはとおるという両親が決めた許婚がいた。彼とは大学を卒業した年に結婚が予定されていた。しかし、直美さんは半年ぐらい大阪に住んで大阪万博のホステスをやりたいと言い出したのだ。これは両親や許婚への「結婚についてゆっくり考えたい」という間接的なメッセージだった。両親に激しく反対されたが、もし行かせてくれなかったら、自殺するとまで言ってようやく許してもらった。大阪で直美さんは新しい環境、新しい仕事、新しい出会いに夢中になった。戦後初めて世界に日本の復興を見せようとした万博のために力を貸していた人が大勢いたが、直美さんはその中から、臼井という女性にモテモテの男性に一目惚れをしてしまった。

ここまで読む中で、私が自分に聞いていたのは「結婚とは一体何？何で両親が結婚する相手を決めるの？」だった。たった大学3年生で高3から付き合い合った子と同棲しようと勝手に決めた私。「お互いについて良く知ることができそうだからいいんじゃない？」と背中を押してくれたママ。こんな私には両親が決めた許婚が理解できなかった。今は人権や平等について話すすぎて、自分の権利と相手の権利を尊重しあうバランスの取り方が難しく、そんなことをするよりは一人でいたほうが楽だと考え、一生結婚しない人も増えたのではないかと考えた。

結局、直美さんは臼井と付き合いはしたが、東京に戻った。そして、とおるでもなく、お見合いで新聞記者と結婚した。その人とは息を引き取るまで一緒にいた。

本気で愛し合って、お互い尊重し合っていたそうだ。臼井と結婚できなかった理由は彼が朝鮮人だったから、1970年時代の直美さんは怖がったからだ。

どうして朝鮮人だったら結婚できないのかとまた自分に聞いた。今は皆平等で差別してはいけない。朝鮮人だという理由で結婚したくなくなった直美さんのことが理解できないと今の人は言うかもしれないが、直美さんを育てた社会の事情はそうだったから、仕方がなかったと思った。

最後、直美さんは45歳で脳腫瘍が原因で逝った。彼女は娘の葉子に4巻のテープを残した。そのテープの最後の言葉はこうだった。「人生は宝探しなのです。私は時間をかけて、どこかにあるはずの宝物を探し回っていたのです。ただ漫然と生きていては何も見つけることはできない。私は人生から臼井さんを見つけ、夫と娘を得た。」

ようやく、直美さんのストーリーを通じて、作者が伝えたかった「人生は宝探し」というこの本の宝に辿り着いた。直美さんは衝動的で奔放な生き方をする女性で、単に我がままだと作者は言いたかったわけではないと思う。誰にだって直美さんみたいに自分の行きたいところへ行き、やりたいことをやる自由がある。自分の人生から自分の宝物を探す役割はあなたにあると伝えたかったのではないか。私も同棲をして、お互いのことが好きだという言葉と気持ちだけで家庭を作り上げられるものではないと実感した。

また、今まで日本へ交換留学したり、モンゴルでも日本でも色々なアルバイトをして、色々な人に会ったりしてきた。それは全部誰かが私に決めてくれたものではなく、私が送りたい私の人生の一部だったのだ。しかし、自分でやりたいことさえやれば、幸せになれるという甘い話ではない。直美さんも万博へ行き、家族から離れて寂しかった。私も、日本に留学中のアルバイトで、カタカナの私のネームタグを見て私を外国人だと知ったお客様に「馬鹿外人」だと怒鳴られたり、一日に4コマ授業と6時間のアルバイトで食事の時間がなくてお腹を空かしたりしていた時もある。辛いことに会う度に、借りていた6畳の部屋に帰って、一人で泣いて過ごした夜は数えようとしても、思い出されないぐらいだが、過去に流した涙と共に成長し、何かを得たように感じる。

直美さんが最後に言った通りに、人生から見つける宝物は得られる宝物と同じではないかもしれない。だから、ただ漫然と生きていないで、この良い物が出そうなこの世界に何か探し回りたい。死ぬ瞬間までの日、時間、分、秒を積極的に精一杯生きていきたい。

優秀賞

芥川龍之介作「藪の中」を読んで

ハタンバータル ツェースレン

モンゴル国立大学法学部 名古屋大学日本法教育研究センター 3年生

指導教員：八尾 由希子

高校の時、文学の授業で芥川龍之介の「藪の中」を読み、感想文を書く宿題が出た。しかし、私はこの本を読んで、全然分からなかった。なぜなら、この本に出て来る人々（木樵、旅法師、放免、媼）は皆、盗人の多襄丸が武弘を殺したと語るし、盗人の多襄丸も自分が武弘を殺したと白状した。しかし、武弘の妻は自分が武弘を殺したと懺悔し、武弘の霊は自殺したと物語っていたからだ。

今、その時の感想文を読んでも「日本の文化」という言葉が出て来る。日本の文化についての知識が「日本茶」、「着物」、「アニメ」だったその頃の私が、「日本文化」として、いったい何を言っていたかということを確認しながら、今の、日本語と日本を少しでも勉強した私がどう思うかということが面白く、この本を今回の感想文に選んだ。

この本は武弘の死について検非違使に問われた木樵、旅法師、放免、媼などの物語から始まる。ある日、盗人の多襄丸は、ある夫婦に出会い、男（武弘）を殺して女を奪おうと決心する。そこで、その夫婦に「向うの山には古塚があり、私はそこから出てきた宝を誰にも知られないように山の陰の藪の中に埋めた。もし望み手があるならば、安い値でその人に売り渡したい」と言い、その山に二人を連れて来た。初めに、男と藪の中に入り、武弘を殺した。そして、男が急病を起したと言って、女を連れて藪の中に入り、女を手に入れた。この次に、いったい何が起こったのか、事実は不明である。確実なことは、盗人の多襄丸が女を手ごめにしてしまったことと、男が死んでしまったことだ。先に書いたように、だれが殺したのか、あるいは、自殺したのか、最後まで分からない。

この小説で最も印象に残ったところは、深刻な犯罪なのに、皆は自分が犯人だと言っていることである。現代では犯罪、事故などが起こったら、それを自分がしたと正直に言える人は少数ではないだろうか。真実より名声のほうが重要な現代、道徳教育よりアカデミック教育のほうが重要視されている今は、「犯人は私だ」と誰も言えないだろう。

そこで、私も考えた。なぜ、皆は自分が殺したと言っているか。最初はその理由

が全然分からなかったので、もう一度読んでみた結果、これは、たぶん日本人の考え方かもしれないと思った。なぜなら、以前金田一春彦の「日本語の心」という本を読んだことがあるからだ。そこには、日本の文化や日本人の考え方は、日本語の心であるという意見が書いてあった。例えば、バスにおばあさんが乗ってきたとしよう。そうすると、座っている人が立って席を譲る。その時におばあさんが「すみません」と謝る言葉をのべる。なぜなら、おばあさんが「私が乗ってこなければ、あなたはいつまでもそこに座っていられたでしょう。私が乗ってきたばかりにあなたがお立ちになるということで、申し訳ございません」と思っているからである。

この説明を念頭に置いて考えると、次のことに気が付いた。つまり、盗人の多襄丸が武弘を殺したと白状している理由は、たぶん「私は、この夫婦と出会わなかったら、そして、女の人を手に入れようと思わず、藪の中へ連れて行かなかったら、この男は死ぬことにならなかっただろう」と思ったからかもしれない。次に、女が、自分が男を殺したと言っているのは、一つめは、「手ごめにされた」という理由から、二つめは「自分がいなかったらそんな事故が起こらなかっただろう」などの色々な考えがあったからではないだろうか。そして、最後に、武弘が自殺したと言っているのは、たぶん「盗人に騙されて藪の中へ行かなかったらそんなことが起こらなかった」、あるいは、「藪の中で妻を守ることができなかった」と思ったせいかもしれない。このように、この事件に対して、皆が自分のせいだと考えたので、皆は自分が犯人だと言っているのではないかという考察に、私は行きついた。

最後に、この小説を読むことで、日本人の考え方について少しでも分かるようになり、日本語を勉強するのに役に立ったと思う。高校生の私は「日本では昔は、他の人の妻と結ばれると、必ず前夫を殺すべきなのか」と思い、「妻が結構悪い人なのか」というぐらいに感じていた。それと比べると、今の私はずいぶん成長したと思う。

また、今の新型コロナウイルスの状況に対しても、この小説から考えた日本人像とモンゴル人の違いを感じている。モンゴルでは人々は自分のことだけを考え、マスクもせずに、外に出ていくなどのいい加減な行動をしていることは、モンゴルの人々が抱える問題の氷山の一角なのではないかと考えた。我々がこの小説の作中人物たちのように「自分が悪い」と感じる責任感を持っていたら、この状況がなくなる可能性ももっと高まるのではないだろう。

奨励賞

愛は悲しい

Lkhagvajav Narmandakh

ウランバートル国立大学 東洋研究学部日本語学科 4年生

指導教員：Kkhamjav Eedenetssetseg

長い期間の後、私は病院を退院し家へ歩いているとき、突然、雨がざあざあとして降ってきました。その時、傘を持っていなかったため、ブックオフに入りました。雨が止むまで、色々な本やCDを見ていると、いきなり「100回泣くこと」という本の表紙絵とタイトルに目がさそわれました。表紙をめくって読んで見ると、言葉の選び方がきれいで、私のような日本語を学んでいる人にとっては読みやすい本だったので、読んでみることにしました。

藤井は就職してから実家に帰っていなかったから、犬が死にそうだと実家から連絡を受けたとき、エンジン音を喜んだ犬のためにバイクで帰ることを彼女から提案され、放置していたバイクを彼女にも手伝ってもらって修理。その最中にプロポーズ。復活したバイクで帰省し、生き長らえた犬にも会え、同棲生活を始めた二人。しかし、彼女が体調を崩し、精密検査の結果、卵巣がんであることがわかる。手術、つらい投薬治療をそばで支えるが、彼女は医師の見立て通り、化学療法後3か月で亡くなる。藤井は毎晩酩酊し、涙をながす。その2年後犬も亡くなり、藤井は彼女を失った悲しみから踏み出そうとする。

この本には、愛犬のブックについて「生きているのが不思議なくらいです」と医者が言い、母親が涙ぐむ場面、そして、彼女がとても主人公に合っている素敵な関係なので、会話も可愛く、明るく静かな幸せを感じがし、悲しいけれどもとても心が暖くなる場面がありました。

彼女はスケッチブックを開き、4Bの鉛筆で文字をつづり始めた。「健やかなるときも」、「病めるときも」、「喜びのときも」、「悲しみのときも」、「富めるときも」、「貧しきときも」、「これを愛し」、「これを敬い」、「これを慰め」、「これを助け」、「しぬが二人を別つまで」、「共に生きることを誓いますか」と二人は誓います。

—ずっとずっと続くんだと思っていた

—大丈夫

と僕は言った。

—大丈夫、絶対大丈夫だよ

僕は繰り返した。

—大丈夫

僕は馬鹿みたいに目を閉じた。窓の外で雪が降り続いていた。彼女のために泣くこと、彼女のために泣かないこと。死んでない僕にできることは、そのどちらかしかないのだ。わかってる。そろそろ泣くのは止めなきゃならないし、酒を飲んだりするのも止めなきゃならない。「わかってるよ」、僕は彼女に言った。

心に残る場面、すごく感動する場面がたくさんありました。

「100回泣くこと」を読み終わったとき、こんな問いかけが浮かび上がってきました。誰かと共に生きるということは、いつか失う悲しみを背負うことであり、同時に、いつか失わせてしまう悲しみを背負うことだと。誰かが誰かのためにできることを模索し続け、不安と恐怖の中にいるはずの私にとって、それでもその人に病気のことをきちんと説明してくれることが大切です。お互いに労り合い、不安は最小限に、希望や明るさを与え合う二人の輪郭は次第に鮮明さを増して、藤井の夢の意味へと到達する。この二人は YOU&I ではなく、たしかに WE として、共に在るのだと私は思います。そして、主人公はほんとに良い奴です。若くして婚約者が亡くなるという話を通じて、日常にある幸せは実は貴重な物なんだよと気づかせてくれた。

そして、病気は自分からは言って来ない、吹き飛ばされて来ると言い方があります。人が自分の健康を選ぶことは不可能です。その言葉のように、私も胸椎硬膜外異所性靭帯、胸髄性という診断をされました。だから、この本は私をとっても感動させました。主人公の心を満たしている喪失感の描写はリアルでしたし、決断してきちんと前に進む主人公からは残された人の歩むべき道が示されているような気がしました。悲しいけれども、生きていかなければならない遺された人。恋愛に対する独特な感性も心を動かしてとても感動しました。

この世界では、人が生まれて、死ぬのは事実です。今日は誰が死ぬのか、誰が生まれるのか、誰も知りません。しかし、自分に夢と目標を設定し、それを達成し、やりたいことを実行して、自分の人生と運命を創造していくことは考えられます。生きている間、お互いを愛し、常に人々に感謝を表していきましょう。そして、色々な事を大切にしないといけない。まずは一日一日を頑張ろう。